

高校生とグライダーそして熊谷の地勢的位置づけ

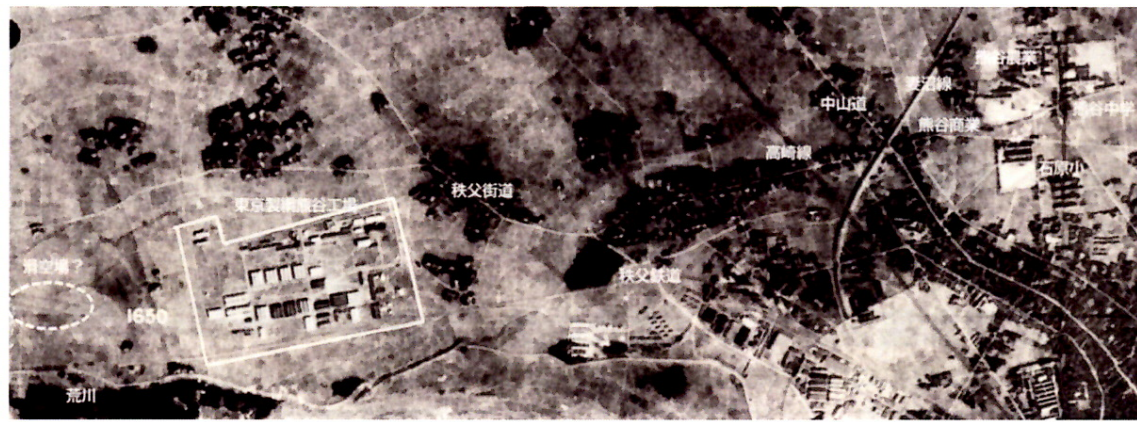
吉田庄一

一 高校生とグライダー

81年前の熊谷空襲体験者の聴き取り調査を行っている。その中で、当時星川に住んでいたKさんから以下のような話を聞いた。「子どものころ荒川土手にグライダーの練習をよく見に行つた、といつてもみんなでゴムを引つ張つてふわりと浮かぶ程度だった」また、8月に刊行した「最後の空襲 熊谷」戦後80年新たな視点で」でも触れているが、熊谷商業学校の生徒が、荒川河川敷に造られたグライダー滑空場の片づけ作業中に、不発弾に触れて5人が負傷し、そのうち1人が亡くなっている。そこで、当時熊谷中学校と熊谷商業学校にあったグライダー滑空部について考えてみた。

戦時中の高校生たちは、あちこちの軍需工場に勤労働員されていた。米軍に1650の識別番号を振られた東京製綱にもだ。それだけでなく、両校には滑空部があり、パイロットを目指した。豊岡の陸軍航空士官学校や熊谷陸軍飛行学校に進む者もいた。赤とんぼに乗ることに憧れていたという。

グライダーはプライマリー機で、ゴムの力で飛ばす構造だ。学校では狭いので、分解してリヤカーに乗せ荒川まで運んだ。河岸段丘を利用して、機体のフックに引つ掛けたゴムをV字型に配置し、それぞれ数人から10人程度で引つ張るのだ。また、機体が動かないように固定させているグループもいて、ゴムの張力が限界に達した時、放たれるのだ。パチンコの原理だ。敗戦間際になってくると、パイロットは十分な教育を受けることなく戦地に送り出された。それを支える少年飛行兵予備軍としての役割を担っていたともいえる。(写真の工場の白枠と識別番号は米軍、以外は筆者が記入)



上の写真は、米軍が1945年7月に熊谷を撮影した一部分である。広瀬にあった巨大な東京製綱熊谷工場(現在その中心は熊谷商業高校になっている。主にワイヤーロープを造つていた軍需工場)の左に滑走路らしきものが確認できる。熊谷には熊谷陸軍飛行学校があり、深谷市には美津濃のグライダー工場があった。市内は中島飛行機の関連工場がたぐさあり、熊谷は飛行機生産とパイロット養成と、戦争における航空機による戦争遂行の重要拠点だったのだ。



写真は初級グライダー練習機プライマリーで、文部省式I型機、このような機体が各中学校に配備されたのだ。

二 熊谷の地勢的位置づけ

なぜ熊谷が最後の空襲の舞台に選定されたのか。ずっと拘つている命題だ。先日、米海軍の報告書を見ていたら「熊谷」の一文字があった。「戦争最後の夜、新たに配備された第8空軍のB29爆撃機が、沖繩から日本本土に対する最初で唯一の攻撃作戦を実施した。その標的は、本州北部の工業都市、熊谷であった」

略の前線基地にもなる。米軍は、熊谷を日本制圧の重要拠点に考えていたのは間違いない。敗戦後すぐに先遣隊が入り、9月には米陸軍第43歩兵師団一万二千人が、熊谷陸軍飛行学校に進駐した。この駐留は1957年7月まで13年間続いた。

昨年8月館林市の資料館で開催された館林と戦争の企画展を見学した。その中に関東地方の地図があり、相模湾から上陸した部隊の行先(制圧区域)に熊谷がマークされていた。また最近入手した米軍の地図に大吠埼から茨城県の石岡、栃木県の古河、埼玉県の熊谷、秩父へと線が引かれていた。なぜ熊谷だったのか、歴史の旅は続く。



会計報告

(2026/1/27~2026/3/26)

収入	12,810円
支出	17,675円
残高	67,074円

編集委員 吉田庄一、小川美穂子、米田主美、大久保由美子
連絡先 吉田庄一 (090-4957-9181)
メール imajn241@gmail.com
HP <http://www.peace-kumagaya.org>